



2020 年 (令和 2 年)
2 月号 (No. 897)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

変貌するチベット——「辺境」は今 2019年10～11月の旅から

3年ぶりに訪れたチベットは大変貌を遂げており、かつて登山者が大いなる憧れをもって抱いていた「辺境」のイメージは、ほとんど消えかかっていた。成都に降り立ち、八一・林芝からスタートして川蔵公路をラ薩へ、総走行距離3400kmの旅で見た現在のチベットの姿を、中村さんにレポートしていただいた。

中村 保

チベット自治区は3年ぶりである。2017年から昨年の夏にかけては、青海省に通った。チベットの変貌ぶりは予断を超えていた。「土木工事大国」中国の発展ぶりはチベットにも「遍く及び、最早「辺境」という言葉は死語である。鉄道と高速道路建設は面で広がり、一般道路も舗装が行き渡っている。習近平は将来、5万kmの高速鉄道

網で全国を結ぶと言う。ラ薩市を取り巻く2つの環状道路ができ、清蔵高原鉄道に並走する那曲への高速道路が建設中であり、念青唐古拉山西部の峰々を指呼の内に望見できる。今回の旅の出発点となったのはチベット第4の都会で、人口30万、人民解放軍西藏軍区の要衝、八一鎮・林芝である。

目次

変貌するチベット——「辺境」は今 2019年10～11月の旅から	1
新入会員の増加につながった 「埼玉やま塾」開塾中!	4
高仙芝將軍はどちらの谷を登ったのか 52年ぶりのヒンズー・クシュ踏査	6
追悼 橋村一豊の思い出	9
追悼 宮森常雄先輩	10
故宮森常雄氏が第1回ナジール・ サビル山岳賞を受賞	11
活動報告 山行委員会	12
支部だより	13
越後支部/信濃支部/北九州支部	
新入会員	14
図書受入報告	16
図書紹介	17
会務報告	18
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	19
編集後記	19

▶ 日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木 10～20時
水・金 13～20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10～18時



デパートの展望台から見た、ライトアップされたポタラ宮殿

急速に変貌するラ薩

省都・ラ薩市は人口が75万人に倍増、現代的な都会になっている。象徴・ポタラ宮殿はライトアップされ、夜空を飾る。大型ショッピング・モールやデパートは華やかさと品ぞろえの豊かさで「ここが

チベット?」と一瞬我が目を疑う。ポタラ宮殿の夜景は、デパート最上階の展望台から撮影した。ラ薩市はここ数年で人口は急増、町はすっかり現代化し、香港並みと言える。高層マンションが次々に建設されており、2つの環状道路が市街を取り囲む。産業は「観光」で、来訪者の95%は中国各省から来る漢族である。ラ薩空港の離発着便のボードには、北京、上海、広州、西安、成都、武漢、昆明など、多くの大都市の名前が表示されている。

今回のメンバーは、中村と一橋大山岳会と縁のある千葉大名誉教授の柿原和夫さん(71歳)、ガイドは10年来の相棒と言っているチベット族アワンである。運転手はチベット族の格尼(ゲネイ)50歳、慎



念青唐古拉山(左端がI峰、7162m)と青藏高原鉄道

重で安全運転。チベットの状況に精通する、英語の堪能な元僧侶のアワンは貴重な情報源である。彼のガイドなしには、旅の成果は十分には得られないだろう。

外国人に対する厳しい規制

2008年の北京オリンピックのときに起きた拉薩での大規模な騒乱以後、東・南チベットへの外国人の入域、規制は厳しくなる一方である。今回の許可取得は昨年8月末に申請、5つの部門から持ち回りでそれぞれの許可をもちつつた。公安局、西蔵軍区、法務局、外国人边防管理局を経て、西蔵自治区旅遊発展庁から拉薩の外国人を

扱う公認の旅行社に許可が出された。

移動中に観光地・拉薩以外で外国人に会ったのは、然烏で会った2人のカナダ人だけである。日本人にも会わなかった。拉薩市内では、外国人観光客をときおり見掛けたが、検閲は厳しい。八一・林芝から然烏の間は随所に公安局のチェック・ポストがあり、その都度許可証の提示を求められた。しかし、これは外国人に対してであり、中国人観光客とホテルは急増しており、夏には大挙して押し掛けてくる。

カンリガルボ山群へ

今回の旅の行程は、成都→八一・林芝→色季拉→通麦→波密→然烏→拉古氷河→…八一・林芝→巴松湖→拉薩である。3年ぶりのチベット自治区だが、急速な変化と発展には瞠目させられた。拉薩→然烏→拉古氷河間の距離(その内、拉薩→八一・林芝間の高速道路39.6kmを含めて)は861km、走行距離の合計は3400kmに達した。10月24日(木) 雨の中、成都空港を飛び立ち林芝へ。山は雲の中、林芝は曇、気温5℃。成都空港でも

林芝空港でも、チベット入域許可証を厳しくチェックされる。アワンが出迎えてくれる。この日はアワンが公安局に出頭して手続きを済ませた後、「神山国家森林公園」を見学して八一・林芝に泊まる。新華書店で最新の2019年1月発行の『西藏自治区地図冊―行政区・交通・旅遊』を買う。一昨年からの地区、自治州の呼称が「市」に統一された。

10月25日(金) 朝6時の八一・林芝は気温9℃、曇。目的の然烏・拉古氷河に向かう。色季拉(4729m)は雲低く、ナムチャバルワ(7782m)は見えなかったが、帰路、晴天に恵まれた。

道路は魯朗から一気に雅魯藏布の支流、易貢藏布と怕隆藏布の合流点、通麦(2000m)に下る。通麦に近付くにつれて、川蔵公路はいくつものトンネルを通過する。公路は完全舗装され、高速道路の建設が進められている。拉薩から



拉古氷河とゴンヤダ(左、6424m)、ゼー(右、6127m)。いずれも未踏峰

八一・林芝までの鉄道建設は間もなく完了し、成都まで延びる路線も準備が進められている。通麦や波密など主要駅の準備が始まっている。

急速なインフラ整備と市街の発展

川蔵公路の危険で最大の難所であった通麦→波密間の「大崩落地帯」は、新たにできた全長6kmのトンネルで早くかつ安全に通過できる。トンネルを過ぎるとやがて趣

のある町、古郷である。右岸に念青唐古拉山東部の6000m峰が威圧的に迫る。道は念青唐古山東部と崗日嘎布山群(東西270km)の間を流れる怕隆蔵布右岸に沿って進む。怕隆蔵布は紅葉が美しい。波密(2725m)は10年ぶりである。町の発展、現代化はここでも進む。波密の住人はカンバ族がメ

インだが、コンボ族(工布江達地方が中心)もいる。松宗、玉普を経て、今や観光の目玉となつている米堆氷河への入り口を過ぎ、正午に拉古氷河への起点、然鳥(3960m)に着く。すっかり町らしくなつている。暖房の効いているモダンなホテルに泊まる。



色季拉から望んだナムチャパルワ西面。1992年、日本山岳会隊が初登頂

然鳥に初めて来たのは1995年の秋である。10年の間に氷河の末端は薄くなり、後退している。温暖化による氷河の後退は、ここチベットでも顕著である。

シユグデン・ゴンパを見て帰路につく

帰路、歴史的な僧院シユグデン・ゴンパを訪れた。1999年に来たときの拉古村は、半地下式の汚いチベ

ット族の家屋が数軒あつただけだが、今は立派な家がたくさん立ち並んでいる。なんと、観光客用にロビーから拉古氷河の全景を俯瞰する5つ星のホテルが立っている。

この歴史的なゴンパは、探検史にたびたび登場している。キングドン・ウオード、フレデリック・ベイリー、ロナルド・コールバックなどである。ゴンパは、1999年には文革による破壊で廃墟同然だったが、再建され往時以上に立派になつている。僧侶は70〜80人、チベット仏教徒の敬虔さと奉仕の精神が息づいている。一見の日本人を皆、明るく笑顔で迎えてくれた。然鳥から徳母拉(4900m)までは高峰展望の格好のルートで、崗日嘎布山群東部の秀峰と氷河が集まつている。

10月29日(火) 波密の朝は気温1℃、快晴。6時、帰路につく。秋の巡礼シーズンだけに、拉薩を目指すチベット仏教徒が多い。公安局のチェック・ポストが多く、その都度許可証の提示を求められる。怕隆蔵布沿いに見える崗日嘎布の、個性的な5000〜6000m峰は見飽きない。夜明けとともに、ま



探検史にたびたび登場しているシユグデン・ゴンパ

行く。振り返ると、四半世紀近く踏査を続けた念青唐古拉山東部の秀峰が郷愁をそそる。

10月30日(水) 朝8時の八一・林芝は気温8℃、快晴。ナムチャパルワを見るために戻つて、色季拉展望台へ行く。いつ見ても、ヒマラヤ東端の秀峰の存在感に圧倒され、雲がたなびく優美な姿に感動させられる。

10月31日(木) 小雨。一路、拉薩へ向かつて小雪の中、米拉山峠(5018m)を越える。

11月2日(土)には念青唐古拉西部の雪古拉(5300m)に行き、チユンモ・カンリ(7048m)の写真を撮り、帰路につく。

REPORT

新入会員の増加につながった 「埼玉やま塾」開塾中!

開塾に至る経緯

2010年4月に、埼玉支部は150名ほどの会員で出発した。その後、10年近い年月が経過したが、その間、埼玉支部の構成人数はほぼ横ばいか微減である。もちろん、その間に毎年数名の新規加入もあるのだが、同時に様々な事情で退会される方がいるのである。当然、年々平均年齢は上昇して、直近では69歳となった。

支部会員は皆さん、それぞれの関心分野で熱心に活動していて、決して支部活動が停滞しているわけではない。今の時代は、高齢者が年々元気がなくなるのではなく、ますます意欲的で元気だからである。しかし、これでは日本人の長寿化のお陰で組織が持っていることになる。やはり、もつと積極的に次世代会員を迎えていかなければ、登山界における公益社団法人として、健康に資する安全登山を振興し、社会に貢献することなど、絵に描いた餅にもなるまい。

埼玉支部「埼玉やま塾」チーム

ダイナミックに新しい会員を迎え入れる策は、登山教室しかないだろう。そして、教室を通して健全で自立した登山者を育成することで、埼玉県警察山岳救助隊から常々指摘されている未組織登山者の遭難事故の防止にも寄与するだろう。先輩支部がすでにそれを立証しているのではないか。やるしかない、と決意した。早速、すでに教室を運営している先輩支部の活動を調べた。特にお隣の東京多摩支部には知り合いの会員も多く、いろいろ実状も聞くことができた。これで気付いたことは、それぞれ支部の基礎体力に差があることで、自分たちの体力に応じた人数規模、やり方が必要だと感じた。

指導者探しと運営方法

埼玉支部には、輝かしい山歴を有する会員がたくさんいる。では、経験豊富な熟年会員が自らの経験を伝承すれば良いのか。ちよつと疑問もあつた。どの世界でも、経

験は陳腐化するのが自明である。やはり、昔取った杵柄方式だけでは不十分であろう。現在の登山技術や装備の特質を熟知し、さらにSNSなどのコミュニケーション手段にも長け、しかも、最近の登山者の思考回路や行動特性も理解し、認識していることが必要だろう。ここは、そのような知識やスキルを有する人材の力を借りた方が良いのではないか。そして、埼玉支部にはプロガイドで、初心者の指導経験や講師経験が豊富な平川会員という、ぴつたりな人材がいるのではないか。

もう一つ大事な視点は、この取り組みを支部の活性化につなげることである。どんな組織でも新人勧誘はやりがいがある。新しい仲間を迎えることは、大きなモチベーションの源泉になる。そこで「埼玉やま塾サポート・チーム」を編成した。プロの指導者に実技コーチと講習をお願いし、支部会員が経験を活かしてこれをサポートする方式が良いのではないか。結果的にこれが大正解であった。登山実技には毎回参加し、平川コーチをサポートしサブの役割を果たしてくれた飯塚会員、すべてに参加



机上講習でも真剣なまなざしで聞き入る講習生たち

してカメラに収め、募集ツールを作成をリードした稲越会員、机上講習の統括などを担い、サポート・チームをまとめてくれた宮川会員、その他の方々が山で積極的に塾生とのコミュニケーションを取ってくれたことが、終了後の入会に結び付いたことは間違いない。また、全くの手弁当であるにもかかわらず、サポート・チームの皆さんが嫌な顔一つせず、実に楽しそうに塾生と接している姿が、まさに支部の活性化そのものであった。

第2期実施概要

時期…5月～10月の6ヶ月間
講習内容…机上講習3回、登山実



行動中も平川講師によるレクチャーは続く

技講習4回(大高取山、武甲山、谷川岳、雲取山)

コーチ兼講師・平川陽一郎会員
(日本山岳ガイド協会認定ガイド)
参加費…1万2000円(全7回)
募集人数…15名

募集方法…運動具店にチラシ配布、『山と溪谷』誌に情報掲載、口コミ、ホームページ、フェイスブックなど。ハイキング中にチラシを配り、休憩中に声を掛けて誘ってくれた会員もいた。

実施に当たり最も心配だったのは、はたして参加者が集まるだろうか、であったが、第1期は13名、第2期は17名と、なんとか催行可能な人数が集まってくれ、ホッと

した。

参加費は、第1期は1万円だったが、これだけの内容で1万円は安い。安くできたのは、本部の支部特別事業補助金7万円をいたただいたからで、感謝、感謝である。

得られた成果と目指すべきテーマ

一番の成果は、経験は浅いが真剣に登山に取り組もうと考えている登山愛好者に、安全登山とは何か、なすべきことは何かを理解してもらい、自立した登山者への第一歩を踏み出してもらったこと。

もう一つの成果は、「埼玉やま塾」を通じて日本山岳会の考え方や活動内容に共感を覚え、また、日本山岳会の仲間になることに魅力を感じて入会を希望してくれた方が、第1期は3名、第2期は9名もあつたということだ。もちろん、新入会員は嬉しいが、それ以上に私たちの活動に共鳴してくれたことが、何よりの喜びである。

第1期は、何人か入会すれば良いと考えた。テーマは、自立した登山者の育成とし、幅広く様々な知識を提供し、山で考える力を育てることに重点を置いた。結果として入会はあつたが、入会后、J

ACの山行への参加ははかばかしくなかった。

第2期は、第1期より多く入会を実現しようと考えた。テーマはサポート・チームで取り組み、自らの仲間を増やすこととし、チームとして講習内容と進行を共有することで、自らの役割を理解してもらい、互いにフォローしながら積極的に関わり合って進出した。結果として第1期より多い9名の入会目標を達成した。

しかし、入った方がいいが、その後どのような活動をすれば良いかの指針を示していなかったため、1期生と同じことが起こる可能性がある。また、入会されなかった方からは、ステップアップ講習会を希望する声が上がった。共通することとは、「埼玉やま塾」の主催団体であるJACの具体的な活動や、入会後の選択を示すことができている。そこで第3期は、全員入会をテーマとした。JAC埼玉支部の2020年度年間計画を説明、入会后には、個々の力量と志向性に合わせて登山を行なうことができることを明確に説明する。「埼玉やま塾」でそれぞれが自立した登山

者として成長することで、私たちとともに安全な登山を楽しめるチームを育てていきたい。

気付いたこと・今後のこと

支部の実態は様々である。登山教室は、支部の足元をしっかりと見詰め、自らの意志で支部が一丸となつて開催することが何より肝要であると思う。埼玉支部は設立からやつと10年の若い支部である。どんな環境の支部でも、工夫すれば支部の実態に応じた登山教室の開催が可能であるし、そこから得られる成果はわずかであっても、必ず支部の活性化を呼び込むことになる。と信じている。

埼玉支部ではすでに1期、2期の結果も総括し、第3期の準備に入っている。講習内容の充実や運営の改善、サポート・メンバーの増強、参加費も含め会計関係の見直し等々を検討しているが、せっかくつかんだ支部活性化の糸口を大事に育てていきたい、と念願している。第2期生は初めての冬山山行にも参加するなど、活発な動きを見せ、支部に刺激を与え始めている。

(高橋努)

TRAVELOGUE

高仙芝將軍はどちらの谷を登ったのか 52年ぶりのヒンズー・クシュ踏査

曾遊の山河との再会の山旅

昨春秋、秘境ワハン回廊を覗きたく、ワハンの南辺にあるカラコルムのチリンジ峠〜カランパール峠〜ヒンズー・クシュのバローギル峠〜シャージナリ峠の4つの峠を結ぶ踏査を、伊丹紹泰委員とふたりで計画した。このルートは、パキスタン政府をして15年ぶりのト

レッキング許可証発行とかで、私たちも期待に胸を膨らませた。しかし9月16日、チリンジ峠(5247m)に向かうべくチャプルサン渓谷に入ったが、ババグンディの国境警備軍に制止されてしまった。中央政府とフンザの地方政府の2つの行政発行のトレッキング許可をもってしても、軍の壁は厚かった。この年、パキスタン大使館のレセプションで、「パキスタンには安全になりました。ぜひ観光においで下さい」と大見得を切っていたし、インドとの境のシアチェン氷河の山や、ヒンズー・ラジのコヨ・ゾム、アフガニスタ

高橋善護(善数)

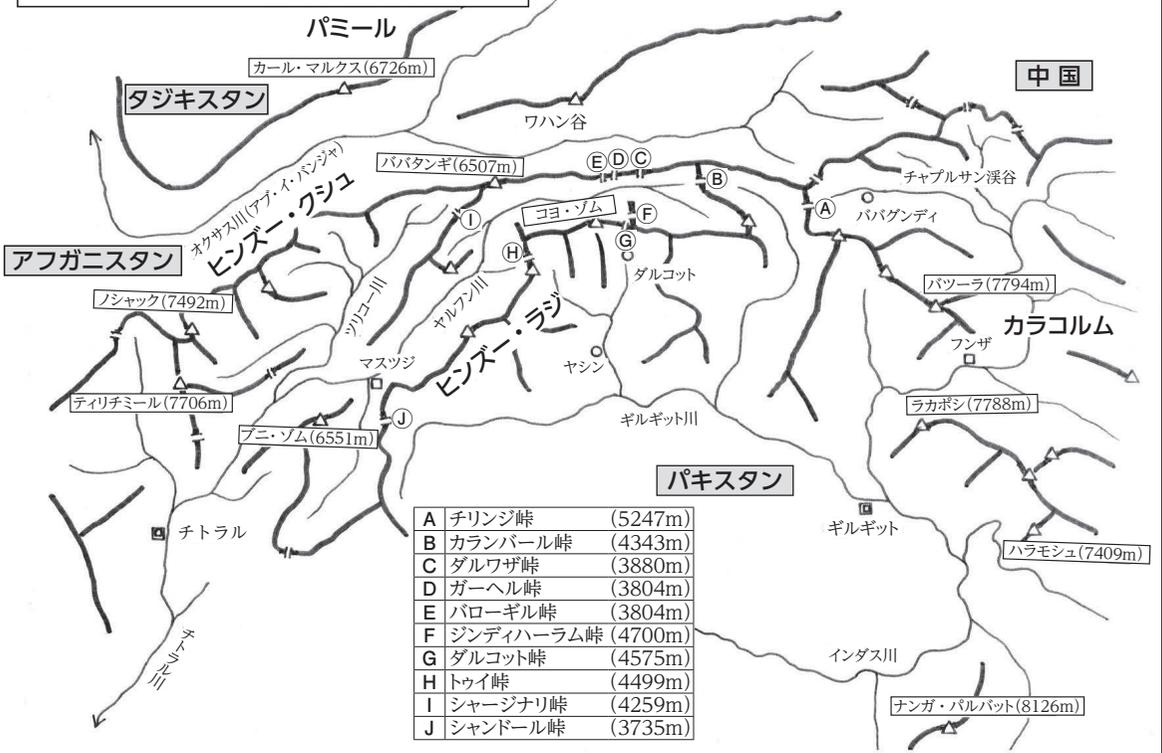
ン国境上のノシヤックなど、国境近辺の登山許可を出していたが、政府許可と軍の国境警備の違いに問題が残った。

チリンジ峠が越えられないので次の峠に回るべく、ギルギットから4WDに乗ってシャンドール峠(3735m)を越えて、ヤルフン川の源流を目指した。

ヤルフン川途中のガゼン谷は、私が1967年に日本人として初めて訪れた谷だ。トウイ峠(4499m)に立つとも、トウイ・ゾム(6158m)や周りの山は大岩峰で、取り付く隙もなかった。北面のカマロー・ゾム(6251m)に登路を見付けアタックに向かったが、パートナーの足首が腫んで倒れてしまった。登山を中止し、担架に乗せて撤退した苦しい出がある(『山岳』第63年、『岩と雪』11号)。

昔はチトラルから歩いて8日かかった道が、今では車で1日だ。52年ぶりに再会したトウイ・ゾムとブラツツヨースの大岩峰に、心を

ヒンズー・クシュ／カラコルム概念図





ジンディハーラム谷は見通しが悪く、峠は見えない

乱さざるを得なかった。ヤルフン川沿いに造られた車道は、バローギル峠下より先のラシユカルガスまで通じていたが、私たちは真夜中に車で通ったため、ヒンズー・クシユの核心部を見ることができなかつた。

朝起きて驚いた。目前にヒンズー・ラジの大山脈が開け、最高峰のコヨ・ゾム(6872m)やトウイ1峰(カロール・ゾム、6660m)などが並んでいる。後ろは、アフガニスタン国境上のバローギル峠の東隣にあるガーヘル峠(3804m)だ。ガーヘル峠はここから距離1500m、高度差2000mで、1時間もかからない所にある。



ダルコット谷は傾斜も緩く、一直線の谷だ

泊めてもらった家のあるガーヘル集落は、南斜面の大草原の中にあつて、ヒンズー・クシユの核心部、バローギル(ポロギル)盆地と呼ぶに相応しい場所だつた。

ラシユカルガスより先の車道終点、イシユワール集落からカラコルムとの境、カランバール峠(4343m)に行き、カランバール湖を一周した。

ジンディハーラム谷か ダルコット谷か

次いでチリンジ峠の雪辱としてダルコット峠(4575m)へ行く。峠から北東に流れるジンディハーラム谷を登って峠に立ち、北西に

流れるダルコット谷を下ってヤルフン川に降りる、1泊2日の一周コースだ。

ダルコット峠は、747年に唐の高仙芝將軍が1万の軍勢を引き連れ、ワハン谷からヒンズー・クシユ最低鞍部のバローギル峠を越えてヤルフン川に降り、次いでダルコット峠に登りヤシン、ギルギットを攻めた歴史的に著名な峠である。この高仙芝將軍がダルコット峠に登った道が、ジンディハーラム谷なのか、ダルコット谷なのか議論がある。

深田久弥の『中央アジア探検史』高仙芝の章には、3000の兵をワハンに残し、7000の兵を引き連れて、ワハン谷から「進むこと三日、ダルコット峠に至る」とある。バローギル峠越えに1日、ダルコット峠へ2日だろうか。深田さんはまた、『ヒマラヤの高峰』コヨ・ゾムの章に、この遠征軍のルートを実地に調査した、中央アジア探検家のオーレル・スタインは、「いろいろ考証の末、高仙芝の軍隊はその前者(ジンディハーラム谷)によつて峠へ登つたとしている」と。スタインは『中央アジア踏査記』の二章に「この記念すべきシナ人

の大事業の顛末についてはつぎの三章と二章で述べることにするが……」と書いているものの、『中央アジア踏査記』は二章で終わり、二二章がない。

スタイン研究家の井出マヤさんに調べていただいたところ、スタインは著書『セリンディア』と『インナーモースト・アジア』(ともに英文)に、高仙芝の軍がジンディハーラム谷(原文は英語で別名。筆者が現地名に直す。以下同じ)からダルコット峠を越えたと考える根拠は、1895年に帝政ロシアと領土確定交渉を行つた大英帝国のパミール国境査定委員会が、ポニール60頭を連れてギルギットからワハンに入った際、往復ともジンディハーラム谷を通過していること。そして、委員会の一行はヤルフン川に降りてからダルワザ峠を越えてアフガニスタンに入っているの、高仙芝軍もダルワザ峠を越えている可能性があること。もう一つの根拠として、ワハン側からダルコット峠を越える場合、ジンディハーラム谷の方が、ダルコット谷経由よりも1300ftほど登るのが低い(実際は1200m高く登る)、とスタインが書いて



ジンディハーラム峠の右下にダルコット峠を見る

いる、とご教示いただいた。

私はダルコット谷説を支持

私は現地で両方の谷を登下降りてみて、ダルコット谷説を取りたい。ダルコット谷は、ヤルフン川出合のチカール集落(3690m)から峠まで高度差900m。氷河の傾斜は緩く、大きなクレバスも少なく、馬やヤクでも登りやすい。谷は一直線に流れているので間違えようもなく、大雪原の肩まで登ると、門柱のように2つの岩峰の間の雪原が開いていて、南へ下る峠と分かる。この谷は下から全体を見通せ、指揮官にとつて部隊を把握しやすい登路である。

それに比べてジンディハーラム谷は二俣に分かれ、登路の右俣は下から見ると右に回っていて、奥に峠があるとは思えない、見通しの悪い谷である。その上、最上部の大雪原に入ると、どこを越えればダルコット村に通じるか分からない。私たちには地図があり、先の資料によつて右の雪稜(ジンディハーラム峠(4700m))。峠というより乗越)に登つて初めて、120m下の大雪原に2つの門柱に挟まれたダルコット峠が見える、複雑なルートである。

それにヤルフン川出合(3630m)は深いゴルジュになっていて、左右の谷の方がよほど開けていて入谷を間違えそう。地元民に案内させたとしても、まずは斥候を出して谷全体の偵察をしてからでない、7000の大軍勢を引き連れてこの谷には入れない。

スタインは1906年と1913年の2回ともダルコット谷を登っていて、ジンディハーラム谷を登つてはいない。「国境査定委員会が通つたのだから」とする根拠は弱い。一度登つていれば、結論は違つたものになっていただろう。1272年も前の話であるから、

氷河がどのようなようになっていたか分からないものの、地形は変わりようもない。とにかく、「あと2日」で峠に立たねば史実と合わない。南のダルコット村へ行くために名付けられたダルコット谷である。ジンディハーラム谷ルートをとつたのであれば、なぜダルコット峠より高い「ジンディハーラム峠越え」との記録が残されなかったのだろうか？

7000の大兵力が、ヤシン背後の峠から急な南面をダルコット村目掛けて1800mも駆け下つて攻め込んだのだと思うと、ワクワクする。私はダルコット峠の現場を歩きながら、そんなことを考えていた。

ダルコット峠を下つた後、国境上のバローギル峠(3804m)を訪れたく、イシユカルワルズの陸軍駐屯地で打診するも、峠往復は許可されなかった。峠には監視カメラがあり、兵隊も常駐している、と村人たちが言うのも本当だろう。砦の塔の窓には、峠に向けた機関銃口が見える。安全



シヨンバークも見た自然の大岩橋

宣言を出したものの、国境には監視の目を光らせている証であった。早々にバローギル(ボロギル)を離れ、次の峠に向かう。シャージナリ峠(4259m)へ登るシル谷からは、52年前前に登り損ねたトゥイ峠のカマロー・ゾムがよく見える。峠の下りで道を間違えてしまつたが、シャージナリ谷のツリコー川出合近くに、山から転げ落ちた大岩が重なつてできた自然の大岩橋があった。この橋は1935年に峠を越えた探検家レジナルド・シヨンバークが『異教徒と氷河―チトラール紀行』に書いている橋で、84年以上も流されずに残っていた。

52年ぶりのヒンズー・クシュ再訪だったが、実り多き山旅であった。



宮森常雄(みやもり・つねお)

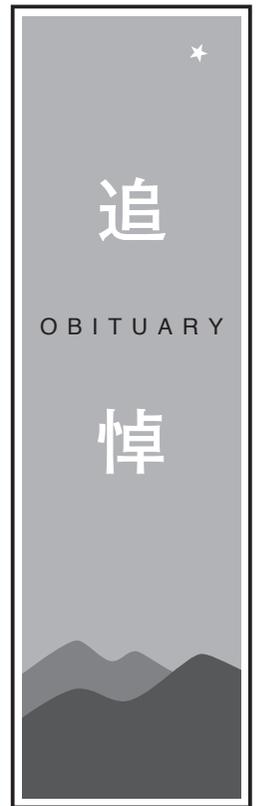
会員番号5723

1932年 福島県会津若松市生まれ
 1958年 東京農業大学醸造科を卒業、宮泉銘醸(株)に入社。在学中は山岳部に所属
 1964年 日本山岳会入会
 1967年 東京農大ヒンズー・クシユ學術調査隊に隊長として参加
 1977年 日本K2登山隊の學術隊員としてバルトロ氷河を測量
 2001年 『ヒンズー・クシユ・カラコルム登山地図』を刊行
 2002年 「秩父宮記念山岳賞」を受賞
 2012年 JAC福島支部の登山隊総隊長としてカラコルムへ
 2019年8月14日 逝去、享年87

追悼 宮森常雄先輩

宮崎紘一

宮森先輩が昨年8月14日に亡くなられた。この日は偶然にもパキスタンの独立記念日で、先輩とヒンズー・クシユ、カラコルムとの縁を感じます。この追悼文を書くに当たって優子夫人に相談をしていたとき、夫人がナジール氏から乞われて分骨を届けにパキスタンに行くとき、ますます縁を再認識していたところです。帰国した夫人の話では、おりから開催され



ていたパキスタン山岳祭で、「ナジール・サビル山岳賞」の第1回受賞者に選ばれたとのことで、さらに認識を深めさせられました。先輩の業績は、2002年に秩父宮記念山岳賞を受賞した著作『ヒンズー・クシユ・カラコルム登山地図』により周知のとおりです。この仕事は、インダス川流域からアフガニスタンの砂漠まで、東西2000kmにわたる広大な地域の6000m以上の1215峰が緯度・経度で位置付けられ、地形の特徴と登山史を含む情報が記され

たもので、最初のパキスタンでの登山と調査以来、30年を超す年月をこの調査に費やした成果です。

先輩は東京農業大学山岳部出身で、私の6年先輩です。私が入部したところは雲の上の大先輩で、当時からご自分の山登りを熱く語って周りを惹き付け、仲間としていく特技を持っていました。会津の造り酒屋の2代目として社用で上京する機会を利用して、山岳部の部室に立ち寄ってくれました。当時はあまり知られていなかった奥只見地域の沢や岩壁の写真を私たちにを見せて熱く語り、郷土の山を世の中に紹介しようといき込んでいた様子が、今でも目に浮かびます。そして、奥只見に若手OBを連れ出して田子倉湖を船で渡り、アプローチのない沢を登ったりしたときは、得意満面でした。

山岳部の知らない山登りを語り、最先端の人工登攀の用具や技術を説明してくれました。ときには時間を忘れて部室からザイルと三つ道具を持ち出し、キャンパスの大木の枝をオーバーハングに見立てて、ダブルザイルとアプミの使い方をご指導してくれたものです。さらに興味を持った私たちを三ツ峠に連れ出し、大ハングに挑戦させられたこともあります。一方、1977年発行の農大山岳部の部報『報告3号』に、中間発表ともいえる「カラコルム氷河周辺図」と解明にまつわる一文を寄せて、山岳部の山登りが染み付いていたOBたちを驚かせたものでした。

地図作成の間も同志を募ってネパールの小学校建設の援助を行います。80歳になつてからも、JAC福島支部のカラコルム登山隊の総隊長として、東日本大震災で計画の実行が危ぶまれた隊を「復興を世界にアピールするために頑張り」をスローガンにして実行。自らBCで指揮をとり、2峰の初登頂を成し遂げています。亡くなるまで登山との関わりを持ち続け、宮森イズムを貫き通して87年の人生を生き抜いた先輩でした。

私がJACの役員をしていたとき、先輩から「君に預けておくよ」と渡された物があります。昭和33年、宮森常雄設計、佐々木健臣作製による日本初の埋め込みポルトですが、紹介する機会がないままになつていくことが、先輩を送るに当たり、心残りになつていきます。

AWARD

故宮森常雄氏が第1回
ナジール・サビル山岳賞を受賞

寺沢玲子

パキスタン国内各地で2週間にわたって開催された第9回パキスタン山岳祭の締めくくりのイベントが2019年12月11日、国連食糧農業機関とパキスタン貧困緩和基金の支援を受けてイスラマバードのComsats大学で行なわれ、今回初めて創られた5つの賞がそれぞれ授与された。

その一つ、同国登山界牽引者のひとりであるナジール・サビル氏の名を冠したNazir Sabir Moun-



受賞したNazir Sabir Mountaineering Award

taineering Awardが、カラコルム地図作成者の故宮森常雄氏に授与され、優子夫人がスペシャル・ゲストのSewa Ramsalネパール大使から代理受賞した。

ナジール氏に、候補者のひとりとして宮森氏を挙げたけど、どうなるか分からないとお聞きし、とりあえず誘われるままに会場に足を運んだというのが実情。我々は授賞式のために訪れたわけではなかったため、夫人は会場で名前を呼ばれて初めて受賞を知り、驚きと感動でいっぱいだったようだ。宮森氏が亡くなられたのは奇しくもパキスタン独立記念日の8月14日。夫人から連絡をいただいたものの、家族で静かに葬送したいとの気持ちを察し、私は胸の内に秘めておいた。しかし、どこから聞き付けたのか、パキスタン国内では「宮森氏逝去」の報が飛び交い始めた。一段落したところ、宮森氏を慕っていた彼の地の人々から散骨の希望を聞かされ、そのことを

夫人に伝えたところ、まずはお世話になった方々に会いに、遺骨とともにイスラマバードまで行きたいとのこと。当初は夫人独りで訪パの予定だったが、いろいろな事情があり、結果的に私とふたりで行くこととなった。

宮森氏は1967年に、東京農業大学学術調査隊長として当時は資料や地図の極めて乏しかったチトラルに入域、1977年には、日本K2登山隊の学術調査隊員としてバルトロ氷河の測量を行なっている。その後もアフガニスタンやパキスタン山岳地域の地形調査を精力的に行ない、1979年には同地域の地図を作成、2001年には、それに肉付けした山岳研究書と13枚の地図シートを併せた大作『カラコルム・ヒンズークシュ登山地図』を発売、JACの第5回秩父宮記念山岳賞を受賞したのは、ご承知のとおりである。

出版後にいくつかの誤りも指摘されたが、自らの足で現地へ赴けなくなつてからも引き続きその地図の加筆訂正を行なっていた。2012年にJAC福島支部が初登頂した日バ国交樹立60周年記念登山の未踏峰への許可も、宮森氏へ



著作をナジール氏に贈呈する優子夫人

の敬意の表われだったということ、のちに観光省で聞かされた。永年患っていた慢性関節リウマチに苦しみながらも、ネパールでの学校建設やカラコルム研究に情熱を注いでいた氏とは永年、「ヒンズークシュ・カラコルム会議」主催者と常連参加者の関係である。個人的に親しく話すようになったのは1992年ごろ、ネパールの安宿で遭遇してからである。

病の辛さが出ると、決まって「気付け薬代わりの写真を！」と連絡をいただいた。これはその後、4年に及ぶ悪性リンパ腫で苦しんでいるときも同じだった。我々が足を踏み入れたカラコルムの小さな峰々からの写真を熱心に山座同定し、辛さを一時的にでも忘れて、楽しんでおられたようである。

(日本ヒマラヤ協会、ヒマラヤンクラブ会員)

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

山行委員会

年次晚餐会記念懇親山行 「三ツ峠山」に参加して

10年近く前、富士山に登った折
下山後に河口湖から三ツ峠山を眺
めた記憶があり、今度は三ツ峠山
から富士山を見てみたいと思い参
加を決めた。

三ツ峠山は開運山(1785m)、
御巢鷹山(1775m)、木無山(1
732m)の3つの山の総称との
ことで、今回はその一つの開運山
に登った。

12月8日(日)午前8時、JR新宿
駅西口・工学院大学前に集合。参
加者55名がバス2台に分乗して8
時10分、出発した。出発して間も
なく、今回の山行の責任者で山行
委員長の征矢三樹さんより日程の
確認、諸注意があった。

30分ほど過ぎるとバスの車窓か
ら大きな富士山が見えてきた。天

気は快晴で真っ白な雪を被り、太
陽の光を浴びて輝く富士山を間近
に見て、早くも興奮状態に。走る
バスの中から苦戦しながらもなん
とか写真を撮る。

10時半ごろ、三ツ峠登山口近く
に着いたあたりで、そこから先は
大型バスが通れず小型バスで3往
復することになった。そのため全
員そろっての登山スタートとはな
らず、着いた人から順に出発。3
班に分かれ、私は2番目のグルー
プの約20名で登り始める。

コースは三ツ峠登山口から開運
山山頂までの道を往復する。登山
道は狭いながらも整備されていて、
ブナの林に囲まれた気持ちの良い
山歩きが続く。黄色のスカーフを
巻いた山行委員の方々が先頭、中
間、最後尾にいて、全体の様子を
見ながら安全登山に気を配りなが
ら歩かれていた。

出発から40分ほど歩いたあたり

にベンチがあり小休止。各自水や
行動食をとる。そこからさらに40
分ほど登山道を登って三ツ峠山荘
前の広場に到着。

振り返ると、目の前に巨大な富
士山がデーンとそびえていてびっ
くり！登山道は林に囲まれ周り
の景色が見えなかったため、突如
現われた巨大富士に言葉もない。
しばらく写真を撮ったり、周りの
人たちと「きれいですね」「すご
いですね」と富士山礼賛をしたのち、
三々五々ベンチに座って美しい富
士山を見ながらの昼食。

3番目のグループの人たちも到
着して昼食を済ませると「写真を
撮ります！」の声がして、三ツ峠山
荘と四季楽園の中間地点にある広
場に集合。逆光で富士山をバック
の写真は撮れなかったが全員で記
念撮影。遠く北西方向に広がる南
アルプスの山々、「あれは甲斐駒、
仙丈、間ノ岳……」と山行委員の
方々が教えてくださる。

そこから開運山山頂へは、富士
山を見ながら整備された階段状の
登山道を15分ほど登る。13時20分
山頂到着。立派な開運山山頂の標
識と富士山をバックに各自写真を
撮る。13時50分下山開始。下山は

来た道を下る。14時30分。登山口
に到着する。

ここで朝乗ってきたバスの1台
が故障したので、全員が1台のバ
スで帰ることになったとの説明が
ある。2時間以上のバスの旅も他
支部から参加の会員の方々と山
談義が弾み、あつという間だった。

渋滞で予定より約1時間遅れて
18時30分、新宿駅西口に到着。あ
たりはすでに暗くなっていたけれ
ど、快晴に恵まれ、最高の富士山
を見られた満足感で笑顔いっぱい
の皆さんと口々に再会を約しお別
れした。

このすばらしい山行を企画、準
備してくださった山行委員の皆さ
まに心からお礼申し上げる。あり
がとうございました。

(東九州支部 下川智子)



寄附金及び助成金などの受入報告

(令和2年1月31日まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
日向 祥剛 会員	300	北九州支部ルーム 運営費
匿名希望	15	日本山岳会運営費
古川 研吾 理事	50	雷鳥保護活動資金
熊岡 達夫 会員	30	静岡支部創立70周年 記念事業
木村 勝利 会員	50	静岡支部創立70周年 記念事業
安間 荘 会員	10	静岡支部創立70周年 記念事業
山崎 郁郎 会員	15	静岡支部創立70周年 記念事業
照内 豊 会員	20	静岡支部創立70周年 記念事業
西村 しのぶ 会員	10	静岡支部創立70周年 記念事業
青野 興喜 会員	35	静岡支部創立70周年 記念事業
海野 俊久 会員	10	静岡支部創立70周年 記念事業
實川 欣伸 会員	20	静岡支部創立70周年 記念事業
久保田 保雄 会員	30	静岡支部創立70周年 記念事業
小西 晃 会員	100	静岡支部創立70周年 記念事業
有元 利通 会員	10	静岡支部創立70周年 記念事業
(一万円未満 4名の氏名省略)	17	静岡支部創立70周年 記念事業

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

越後支部
越後YOUTH設立経緯
とその取り組み

越後支部は、1946(昭和21)年12月5日創立で、全国33支部では関西支部に次ぎ2番目に誕生した支部だ。日本山岳会創立発起メンバー中、唯一地方出身で第2代

会長となった高頭仁兵衛翁(注)を顧問とし、藤島玄初代支部長から爾来七十有余年の伝統と実績を有し、支部会員数で一大勢力を形成して一目を置かれた支部であると自負してきた。戦後混乱期の支部創立だったが、日本山岳会マナスル初登頂に象徴される時代でもあり、「日本山岳会」のブランド力と

登山ブームにより入会者も多く、「何もしない支部」と称して支部会員の勧誘・加入や育成を考えなくても発展し活動できた時代だった。しかし、「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」と白頭を悲しむ翁の詩のとおり、年月の経過により組織の新陳代謝がなくなり、会員減少と高齢化の傾向が進み徐々に活力を失ってきた。以前から問題提起されて改革意識はあったが具体的対策ができず、この10年ほどで会員数は250名↓180名と70名強の減少。平均年齢は67歳↓74歳へと7歳上昇した。昨年までの支部会員構成は40歳台

1名、50歳台13名で60歳台以上が160名ほどの極端な逆ピラミッド形を呈していた。さらに10年後の状況を考えると、まさに支部存続の危機的状況にある。精力的に登山を志す若手会員を増強し、バックアップしなければ支部活性化は成り立たない。

昨年7月25日に開催した越後支部伝統行事の「第62回高頭祭・第66回弥彦山たいまつ登山祭」に、本日から古野会長と野澤・坂井両副会長も参加していただき、支部会員と交流しながら将来的課題を話した。越後支部では早急にできる限りの対策を取るべく、今年度より支部長直轄の「YOUTH委員



本部YOUTHと越後YOUTHの交流会メンバー



交流会での搬送訓練(妙高・杉ノ原)

会」を設置し、支部再構築と活性化への取り組みを説明し、本部YOUTH CLUBに協力と支援を依頼して行動を起こすことにした。

2012年の公益法人化以降、越後支部の事業多角化を進め実行してきており、支部活動の活性化に大きく踏み出している。この機運をもって、引き続き総力を結集して支部再生への結果を出したいと考えている。現在、越後YOUTH3ヶ年計画を策定しており、会員の勧誘・加入と育成を目的とする公募登山や登山セミナーを企画し、登山の楽しさを体験しながら知識や技術の普及啓蒙を図り、日本山岳会の魅力をアピールして

支部入会を促す。

支部の将来を背負う若手中堅会員には、伝統行事の継承を指導しながら将来的な幹部リーダーとして育成し、本部YOUTH CLUBとの交流や情報交換を通して、日本山岳会の仲間づくりを推進していきたいと思う。日本山岳会の全国ネットワークを利用し、本部や各支部との連帯感を醸成して、国内および海外の登山などにも連携できる環境づくりを進めたいと考えている。現在、本部YOUTH CLUBと越後YOUTHの仲間で、スノートレッキングや雪崩講習会などで交流が始まり、仲間づくりが芽生えてきている(写真)。

《注》筆者は、高頭翁の出身地、長岡市深沢町在住で分家(西高頭の御当主・高頭璋氏にお会いし、お話を聞く機会を得た。その際に高頭家の系図を見せていただき、次の指摘を受けた。「高頭仁兵衛は代々の世襲名であり、個人名には義の付く名前を命名している。山の仁兵衛は9代目で、名前は義明と名乗り、本来は高頭仁兵衛義明でない」と特定できない」と言われた。

(支部長・桐生恒治)

信濃支部

信州の里山―青木三山

信濃支部では、東英樹副支部長が山行委員長となり、毎月の山行計画を立てている。2019年度は「温泉と山」をテーマに、雷鳥沢と地獄谷温泉、白馬岳と白馬鎗温泉、黒部峡谷・下廊下と阿曾原温泉などが計画され、8月は青木三山と田沢温泉で催行された。

長野県小県郡青木村には、山名に「神」の名が付く山が3つあり、「青木三山」と呼ばれている。大明神岳(1232m)、夫神岳(1250m)、女神岳(930m)だが、いずれも独立峰である。青木村は東



再挑戦して登頂した大明神岳山頂

急を築き上げ、電鉄王と言われた五島慶太やヒマラヤ観光開発株式会社を創業し、ホテルエベレストビュウを建て、先日亡くなられた宮原巍の誕生地としても知られている。

この山行の参加者は4名、8月24日(土)の朝、松本から三才山トンネルを抜け、鹿教湯温泉を左折、143号線を青木村に向かった。途中の道標に大明神岳コースの標識があったので標識を左に折れ、長沢川に入って途中で車を止め大明神岳に向かった。地図を持参せず、スマホのアプリを頼りに大明神岳の登山口を探したのが見付からず、いつしか東山道の茶屋跡に出てから間違ったことに気付いた。結局大明神岳を諦め、そのまま歩を進めて保福寺峠に登り、ウエストン師の足跡を偲ぶことにした。午後は計画を変更、夫神岳に登ることとし、登山口である「まるべりーオートキャンプ場」へと向かった。無料駐車場に車を置き、頂上を目指す。頂上までアカマツ林の急登を登ること約1時間30分、途中「月波の泉」という湧き水もあって、厳しくも快適な登高だった。

夫神岳は「出浦富士」とも呼ばれる左右対称の独立峰で、毎年7月15日に「岳の幟」を立てて、雨乞いが行なわれていた。別所温泉を挟んで女神岳があり、ともに干ばつに悩んだこの地域で雨乞いを行なった山として知られている。

この日の宿は、信濃支部員でもある宮原岳子会員が経営する島崎藤村縁の宿・田沢温泉「ますや」。木造3階建ての味わい深い旅館で汗を流した。

明けて25日は、昨日登頂を諦めた大明神岳に再チャレンジする。宿から30分ほどで登山口を見付けて登高開始。急な西尾根を登ること45分で頂上に達した。

頂上は雑木に囲まれた小さな平地で、残念ながら眺望はなく、記念写真を撮り早々に下山した。計画では女神岳を予定していたが、次回はメンバーそれぞれで登ることとし、青木三山の山行を閉じた。里山とはいえ、侮ればとんでもない所に出るといって、怖い思いをさせられた山行であった。

(事務局長・古幡開太郎)

北九州支部

第3回榎有恒碑前祭

第3回榎有恒碑前祭は令和元年10月20日(日)、快晴の下、北九州市門司区の風師山(別称「風頭山」)山頂に設置されている榎有恒記念碑と略歴碑の前で行なわれた。

今回の碑前祭には、森武昭元日本山岳会会長(神奈川支部)、高木莊輔福岡支部長ほか北九州支部会員を含め22人が出席した。主催者として、関口前支部長が挨拶を行ない、次に森元会長の来賓のご挨拶、北九州市門司区長の祝辞を北



風師山山頂での記念撮影

九州支部の丹下副支部長が代読披露した。その後、献花を三宅会員が謹んで捧げ、町元会員の指揮で「坊がつる賛歌」の合唱を行なった。肅々と一連の記念行事が進んだのち、横有恒記念碑の前で全員の記念写真を撮った。

記念行事が終わった後、山麓の「門司倶楽部」に席を移し記念食事を開催した。会は園川顧問の乾杯に始まり、森元会長より越後の銘酒「八海山」の差し入れもあって、楽しく大いに盛り上がった。伊藤顧問の万歳三唱、竹本副支部長の閉会の挨拶に続き全員の記念写真を撮り、本日の横有恒前祭を終えた。

ここで横さんの記念碑がなぜ風師山に設置されたのかを、関口興洋前支部長の文により経緯説明をする。(榊俊一)

《1956年、マナスル初登頂に成功した第3次マナスル登山隊の隊長を務めた横有恒氏が初登頂の報告をするため、1958年に九州の各地を回り、10月、旧門司市にあった毎日新聞西部本社へ、支援をいただいたお礼の挨拶に立ち寄られた。そのとき、風師山早朝



「坊がつる賛歌」の合唱指揮をする町元会員

登山会の堤甚五郎会長（元日本山岳会会員）が、横さんを関門海峡のすばらしい展望台である風師山にご案内した。当時の感慨をのちに記したためた横さんの詩文を基に、堤さんが記念碑を設置した。》

この頂に立つ 幸福の輝きは
これをとらふる 術を知りし
山人たちの 力によるものなり
昭和三十三年十月
横有恒



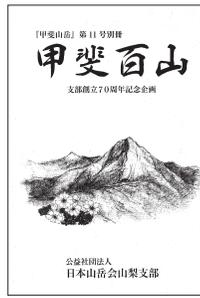
横有恒

図書受入報告(2020年1月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
高田哲郎	秩父の地名の謎101を解く： 秩父が解れば日本が分かる	365p/19cm	埼玉新聞社	2018	出版社寄贈
高田哲郎	秩父の地名の謎99を解く： 秩父が解れば日本が分かる	320p/19cm	埼玉新聞社	2019	出版社寄贈
埼玉新聞特別編集 委員室(編)	地名は語る：埼玉の歴史と伝承	200p/18cm	埼玉新聞社	2019	出版社寄贈
雁部貞夫	わがヒマラヤ 雁部貞夫自選歌集： オアシス・氷河・山々	303p/22cm	青磁社	2019	著者寄贈
伊藤精一	俺のアラスカ： 伝説の日本人トラッパーが語る狩猟生活	267p/19cm	作品社	2020	萩原浩司氏 寄贈
弘前市立郷土文学館 (編)	岩木山と文学： 弘前市立郷土文学館開館30周年記念	44p/30cm	弘前市立 郷土文学館	2020	発行者寄贈
樋口明雄	北岳山小屋物語	302p/19cm	山と溪谷社	2020	出版社寄贈
羽根田治	山岳遭難の傷痕：十重大事故から読み解く	399p/19cm	山と溪谷社	2020	出版社寄贈
加藤公夫	松浦武四郎の釧路・根室・知床探査記	277p/19cm	北海道出版 企画センター	2019	出版社寄贈
九州大学山岳会(編)	めろ・さてい (No.9)： 九大山岳部 創部70周年記念特集	391p/26cm	九州大学山岳会	2019	発行者寄贈
津軽百年の森づくり	岩木山弥生登山道整備事業報告書 2019年	16p/30cm	津軽百年の 森づくり	2020	発行者寄贈
京都トレイルガイド協会 (編著)	京都一周トレイル (英和バイリンガル表記)	240p/21cm	ナカニシヤ出版	2020	出版社寄贈
小泉武栄	日本の山ができるまで： 5億年の歴史から山の自然を読む	216p/22cm	A & F	2020	出版社寄贈

山梨支部創立70周年を記念し、これまで歩き歩き登ってきた山々から選んだ100の山。「山梨百名山」は、山梨県が1997年に選定したもの。そこに載らなかった「埋もれた山々に息吹を与えたい」と古屋寿隆事務局長は言う。

古屋に甲斐百名山の好きな山を尋ねると、いくつも挙がった。甲府市中心部に位置する愛宕山は、子どもたちの遊び場だったそうだ。今は五十余人ものグループが、毎朝山頂でラジオ体操をする。その



2019年12月
日本山岳会山梨支部
A5判208頁
1500円(送料込み)

甲斐百名山

日本山岳会山梨支部編



図書紹介

近くの八王子山は往復2時間。甲府の老舗登山道具店エルクでは、毎土曜朝にトレランを開催する。思い思いのペースで走った後、温泉や朝ご飯へと三々五々散つていく集まりが、日常となっている。

大岩山は甲斐駒ヶ岳の北東に位置する日向八丁尾根にある。古屋は、松濤明が『風雪のピバーク』に記した「甲斐駒環走」を読み、厳冬期にこの周辺を走るように巡る彼に憧れ、その姿を追った。

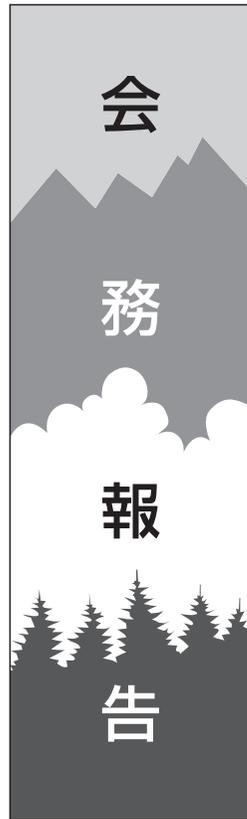
これからの登山社会を牽引する中堅たちも、山梨県に多くいる。120周年記念事業の一つであるヒマラヤ・キャンプを主宰する花谷泰広もその一人。北杜市在住。登山を通じて、地元地域活性化に挺身する。大岩山の東にある鞍掛山は、彼のツアー会社の目玉の一つ。当初は、黒戸尾根の前段階として、標高差のある鞍掛山を選ん

だが、「日向八丁尾根から外れた不遇の山だけれど、甲斐駒の絶好の展望台。黒戸尾根にわずかに咲くクモイコザクラが、鞍掛山には群生する」と。黄蓮谷を従えた甲斐駒ヶ岳の苦味走る姿が目に浮かぶようだ。

大菩薩峠の南に延びる小金沢連嶺を「甲州アルプス」と名付けたのは、甲州生まれの天野和明。初めての山に大菩薩峠を選ぶ人は多いが、「初めて」を終えた先に、もつと甲州の山に登山に触れてほしいと、天野は周辺を多方面から丹念にガイドする。大菩薩峠を点で見るとはなく、東西南北へ稜線を往く。少し歩を進めると、新たな愉しみもある。甲州アルプスは、正面に富士山がどんと構え、歩けば歩くほど南アルプスが角度を変えながら望める、展望の山だ。

故郷の山、日常にある山はありがたい。山梨県は名前がある山だけで544座。高峰や秀峰に恵まれる。けれど本書にあるような人々の日常にある里山、主稜線を外れたひっそりとした山にも目を向けたい。それは、甲斐の山を知りたいだけでなく、それぞれのゆかりの土地の山を思い、足元を見詰め

るぎっかけにもなろう。それがあえて「名山」とせず、「甲斐白山」と言い切った、編者たちの想いなのかもしれない。



購入・問い合わせ 古屋寿隆
TEL 090-4539-3059
✉ ymn@jac.or.jp
(柏澄子)

「優待サービス一覧」の追加および変更

〈追加〉 会員サービスWG

〈追加〉

〔近畿〕ペンションいぶぎ

宿泊料金の500円引き

①0749-58-1323

②前記に同じ

〈変更〉

〔上信越〕高峰マウンテンロッジ
↓高峰マウンテンホテル

①宿泊料金を公式HPの料金から1名につき500円引き

(要直接電話予約)

〔四国・九州〕雲仙・青雲荘

↓雲仙温泉・青雲荘

入浴休憩料700円↓600円

■1月の理事会は休会でした

ルーム目誌 1月

- 6日 YOUTH CLUB
- 7日 常務理事会 スケッチクラブ
- 8日 山行委員会 YOUTH CLUB
- 9日 図書委員会 スキークラブ 九五会
- 14日 山岳研究所運営委員会 資料映像委員会 財務委員会 資
- 15日 三水会 つくも会 マウンテンカルチャークラブ
- 16日 記念事業委員会 みちのり山の会

17日	資料映像委員会	記念事業委員会	
18日	山の自然学研究会		
20日	総務委員会	資料映像委員会	
21日	フォトクラブ		
21日	スキークラブ	バックカントリークラブ	
22日	家族登山普及委員会	YOUTH CLUB	麗山会
23日	公益法人運営委員会	学生部	山遊会
24日	会報編集委員会	自然保護委員会	記念事業委員会
27日	青年部	支部事業委員会	
28日	デジタルメディア委員会	遭難対策委員会	平日クラブ
30日	YOUTH CLUB		
31日	「山の日」事業委員会	マウンテンカルチャークラブ	1月来室者 351名
17日	資料映像委員会	記念事業委員会	
18日	山の自然学研究会		
20日	総務委員会	資料映像委員会	
21日	フォトクラブ		
21日	スキークラブ	バックカントリークラブ	
22日	家族登山普及委員会	YOUTH CLUB	麗山会
23日	公益法人運営委員会	学生部	山遊会
24日	会報編集委員会	自然保護委員会	記念事業委員会
27日	青年部	支部事業委員会	
28日	デジタルメディア委員会	遭難対策委員会	平日クラブ
30日	YOUTH CLUB		
31日	「山の日」事業委員会	マウンテンカルチャークラブ	1月来室者 351名

会員異動

物故

日下田實(4146)	20・1・18	齊木和夫(12121)	
牧田洋子(5441)	19・11・24	遠藤銀朗(12986)	宮城
吉川 仁(6348)	19・9・29	白川幸司(15587)	福岡
雨宮宏光(8923)	20・1・8	櫻井玲子(15746)	東海
古屋 紘(9925)	20・1・4		
平田和男(10235)	19・10・6		

退会

村山裕嗣(11349)	20・1・13
城戸 剛(16526)	20・1・10



インフォメーション

◆四国八十八ヶ所歩き遍路 逆打ち②愛媛県 山行委員会

四国八十八ヶ所1200kmを、春2回秋2回の区切り打ち1年で歩きます。2020年は閏年。逆打ちの年で、順打ちの3倍のご利益があると言われ、4年に1度のチャンスです。2回目は54番延命寺から39番延光寺まで。歩き遍路の経験豊富な四国八十八ヶ所霊場会の公認先達2名が、遍路・巡拝・服装等の作法をお教えします。遍路用品は現地でも購入できます。お遍路はどこから歩き始めてもいいのです。今回からの参加、歓迎します。

日程 4月13日(月)～4月23日(木) 10泊11日
集合 4月13日(月) 愛媛県今治駅。集合12時 JAL431羽田7時25分発 8時55分松山着。11時40分松山発 11時57分今治着 12日に前泊されても結構です。

行程

13日 54番延命寺(泊) 14日 53番円明寺―道後温泉(泊) 15日 52番太山寺―46番浄瑠璃寺(泊) 16日 44番大寶寺―45番岩屋寺(泊) 17日 内子町(泊) 18日 大洲市(泊) 19日 43番明石寺―42番仏木寺(お大日さまの御縁日法要)―41番龍光寺(泊) 20日 津島町(泊) 21日 40番観自在寺(泊) 22日 39番延光寺(泊) 23日 市野瀬バス停(14時32分発) 中村駅 高知駅(16時59分着) (解散)

歩程 1日20～30km余(健脚向き)
費用 参加費1万円(通信費、写真代等)、ほかに1日1万円(宿泊代はその都度精算、賽銭、納経、昼食代)、傷害保険は各自お掛けください。遍路用品は約2万円。別途往復交通費。

定員 10名(先着順)

申込み 4月6日(月)までに数見直へ
TEL 090-17204-4668
sanako@jac.or.jp

◆第17回東海岳人写真展

2020山と自然のパフォーマンス―
期間 3月17日(火)～22日(日)9時30分～18時(最終日は17時まで)
会場 名古屋市民ギャラリー栄(中区役所朝日生命共同ビル8階 第9・10展示室)
TEL 052-26510461
地下鉄栄駅12番出口が便利です

入展料 無料
展示数 80点ほど(全紙)
特別出品 登山家/医学博士・今井通子
共催 (公社)日本山岳会東海支部、中日新聞社
後援 愛知県教育委員会、名古屋市教育局、愛知県、名古屋、NHK名古屋放送局
連絡先 〒460-0014 名古屋市中区富士見町8-8 OMCビルB1(公社)日本山岳会東海支部 写真展実行委員会 山内薫

◆編集後記◆
●先月下旬、私も審査員をしている、子どもたちの自然体験活動企画コンテストの表彰式があり、文部科学大臣賞に次ぐ「優秀賞」に山梨県の南アルプス市立芦安中学校が選ばれました。「五感で感じる体験―南アルプス・鳳凰三山への全校登山及び自然環境・森林保護活動等の支援」が企画のコンセプトでした。
●この中学校では3年間を1サイクルとして、北岳、仙丈ヶ岳、鳳凰三山を全校で登っています。さすが地元だけに事前学習やトレーニングも充実しており、一般的な学校登山と比べ頭一つ抜けていました。将来、このような子どもたちをJACに呼び込めるよう、クラブとしての魅力をより高めていく必要があるでしょう。(節田重節)

日本山岳会報 山 897号

2020年(令和2年)2月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会 〒102-0081 東京都千代田区四番町5-4 サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433 FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野淳
編集人 節田重節
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社